
闇夜に灯る、彼方の灯火

藤戸志乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜に灯る、彼方の灯火

【Nコード】

N8859X

【作者名】

藤戸志乃

【あらすじ】

『闇夜の海には、明かりが灯るよ。愛しい人を捜す、明かりが灯る』

淘汰の住む町にはそんな昔話があった。

淘汰は向かう。

闇夜の海に、あかりを灯すために。

幼い日に交わした、何気ない約束を果たすために。

それは大切な友達を救う、ただ一筋の希望。

淘汰は闇夜に沈んだ海を見つめた。何も見えない暗闇がどこまでも続く。

脳裏にあの時のことが鮮明に思い出された。

親友は、この波音と共に、この暗闇の向こうに消えてしまった。

この暗闇の向こうに異はいる。

淘汰は見えないその闇の向こうを見つめる。

「絶対に灯してみせる！」

そう叫んだ、幼かった自分のあの日の誓い。

それを、果たすために。

切なく、あたたかな、忘れることのない夏の記憶。友情物語。読み終えた後に、優しい気持ちになれますように。(11月から2日に1回更新で、11月下旬頃には完結します)

1 記憶

『闇夜の海には、明かりが灯るよ。愛しい人を捜す、明かりが灯る』

新月の夜だった。

星だけが夜空を彩る。

タツタツタツ……

暗闇の中を、影がひとつ、街灯に照らし出されながら駆け抜けていった。

寝静まった町に、その音が小さく響いた。

1 記憶

『闇夜の海には、明かりが灯るよ。愛しい人を捜す、明かりが灯る』
海に面した淘汰の町には、そんな言い伝えがあった。

物心つく前から、ときどき思い出したように、祖母が歌うように
呟いていたのを、聞いて育った。

それは何と言うことない、よくある昔話。

新月の夜、海でいなくなつた人を捜す明かりが灯るといふ、不思議な物語。

聞き慣れたそんな物語に、ふいに興味を持ったのは、まだ十歳ぐらゐの頃。

いつも一緒にいる幼なじみの巽を誘つて、淘汰は祖母に話を聞かせることにいった。

「ああ、その噺はな……」

祖母がはじめから、ゆつくりと物語を話してくれた。

ちゃんと聞いたのは、それがはじめてだった。

物語は、ちよつとした恋物語。

漁師と、彼に恋をした女の話。

将来を約束した二人だったが、漁師は嵐の海で行方不明になる。

そして女は毎日祈つた。手が空くたび漁師のいなくなつた海へ行き「帰つてきますように」と。

淘汰には全く興味の湧かない昔話だった。

だけど昔話なんてこんなものだと思つた。聞くんじやなかったなあなんて、内心後悔しながら、退屈で、隠れてこっそりとあくびをした。

あとは、楽しそうに話している祖母をがっかりさせないように、義務感だけで聞いていた。

祖母はゆつくりと話していた。

「お月様が隠れた新月の晩のことだ。女の祈りが通じたのか、ぼう……つと、明かりが灯つた。その明かりが目印だった。海から帰れなくなつていた漁師は、それを見つけた。女が明かりを灯して探してくれたんだと、わかつた。漁師はその明かりのおかげで、女と会うことができたんだよ」

「……ふん」

退屈そうに、淘汰は呟いた。

祖母はにこにこ笑いながら、淘汰と巽を見ている。

ふいに、淘汰は気付く。

「なあ、ばあちゃん。明かりが灯るのって、お月様が隠れた夜だけ？」

「そうだよ。新月の夜にしか、明かりは灯らない。いや、灯っていても、それは、見えないからねえ」

「……？」

淘汰は首をかしげた。

「月の明かりが、まぶしすぎるせいかもしれないなあ」

意味が分からずますます困った顔になる淘汰の顔を見て祖母が楽しそうに笑った。

笑われて更に納得がいかなかった淘汰が思いつき顔をしかめた。

話に興味なんてない。だけど、これは納得がいかない。

「なんで？ 明るい方が周りが見えて見つけやすそうなのに」

「ばか。海の上なんて、どこ見ても海しかないんだぞ。真っ暗な中で、光があったらすぐに目に付くだろう？ だから、暗闇のほうが見つけやすいんだよ」

隣でおとなしく聞いていた巽が、呆れたように口を挟んできた。

「……うん？」

顔をしかめたまま淘汰が首を傾げる。

やっぱり、よくわからなかった。

呆れたように巽が見つめている事に気付いた。

「そしたら、何で新月にしか灯らないんだ？」

「だから、灯ってるんだよ。でも、灯つても見えないって言うてるんだって。そうだよね、おばあちゃん」

「巽君は賢いねえ」

祖母が楽しそうに二人のやりとりを見て笑った。

ムツとすると、巽と祖母が顔を見合わせて笑い出した。

「笑うなよ！ うるさあいつ」

淘汰は叫ぶ。

するとそれを面白がっているのか、更に二人がおかしそうに笑った。

それがあんまり楽しそうに笑うものだから、笑われているのに、何だか自分もおかしく思えてきて、ついには淘汰も一緒になって笑い出した。

「なあ、巽」

ひとしきり笑って、淘汰はずいっと親友に体を近づけた。

「もし、だぞ。もし、どっちかが海でいなくなったとき、新月の夜に必ず探しに行こうな！」

「……縁起でもないこと言うなよ」

ぼそりと呟かれて淘汰は「そうだけどき、もしっていったじゃん……」とぶつぶつと呟く。それを見て巽が苦笑した。

「ま、お前はバカだしドジだからね、そのくらいしてやるよ」

巽は言葉の割に優しく笑って言った。

それだけで淘汰の顔はパアツと嬉しそうに輝く。

「おう！ 約束だぞ！」

巽の手を取って、ぶんぶんと腕を振って約束をする。

そして、すっかりその気になって、淘汰はぶつぶつと真剣に考え始めた。

「じゃあ新月の夜は、なんかライトを持っていけばいいのか？」

「早速俺が死ぬことを考えてるのか、淘汰」

呆れたように呟いた巽の言葉など耳にも入れず、淘汰は灯す明かりについてやはり真剣に考えていた。

すると、突然祖母に頭をぱふんと叩かれて、淘汰も顔を上げた。

「何言ってるんだい、淘汰。灯火はそんなものじゃないよ、そんな明かりは何の意味もないものだ。海の迷い人を探す灯火は、その人を想っていたら、ひとりでに灯るもんだ。なあんにもせんでも、ちやあんと灯る」

呆れたように言って祖母はおもしろそうに笑った。

「なんで？ 婆ちゃん。もっとわかるように言えよお」

淘汰はすっかり混乱して情けない声をあげる。

しかし、祖母は笑って自分で考えろと言わんばかりに「どうだろうねえ」とごまかすばかり。

どうやらそれ以上は言う気がないらしい。

淘汰は頭をかきむしった。

納得がいかない。全然わからない。

勝手にどっかに火がつくんだろうか、それとも突然ぱあっとどっかが光るんだろうか？

悩んでも答えは出しようがない。

隣で巽がバカにするような憐れむような目で見ている事に気付いた。

「なんだよ、巽、わかってんのかよ」

「まあ、だいたいはね、想像がつくけど？　つまり、お伽噺って事だよ」

巽が笑って、更にわからなくなる。

「そんなん分かってるよっ。それで、どうして勝手に火がつくんだよっ」

「火はつかないと思うけど。まあ、おばあちゃんの言う通り、その人をホントに思っていれば、明かりは灯るのかもしれないなあ……」

そう言って巽は小さく笑った。

「うっっっ　全然わかんねえ！　まあイヤ、とにかく勝手に灯るんだな、じゃあ俺は巽のことがすっげえ好きだからな、絶対灯してみせるぜ！」

よくわからなかったが、淘汰は自己完結させて鼻息荒く宣言した。

「そりゃ頼もしいが、そんなに俺を殺したがるなよ……」

「やっぱり巽が呆れながら苦笑した。

祖母は隣で見守るように笑っていた。

それは何でもない日の、たわいない約束だった。何もなければ忘れていた、なんでもない、約束。

2 闇夜

2 闇夜

ひとつの影が、夜の町をかけて行く。

タツタツタ……

小さく足音を響かせながら、手に持った懐中電灯が前後に揺れる。街並みを離れ、ぽつぽつと灯る街灯がだんだんと遠ざかっていった。

影の向かった先は、海。

堤防沿いを懐中電灯の光をゆらしながらそれは駆け抜けてゆく。

ジャリ、ジャリと、コンクリートと砂の擦れる音が、階段を踏みしめる足下から響いた。

そして、ザク……と、音を立てて砂浜に足が踏み込まれる。

海にたどり着くと影は止まった。

少年は、肩で息をしながら闇にとけ込んだ海を眺めた。

「闇夜の海には、明かりが灯るよ。愛しい人を捜す、明かりが灯る」

祖母の声が耳によみがえる。

サク、サク

打ち寄せる波の音と、自分の踏みしめる砂の音。

それを聞きながら少年はゆっくりと波打ち際に進んだ。

全てが闇に包まれ、少年の影も海と陸の境も、海と空の境も無く、全てがひとつになっていた。

ただ、足下を灯す懐中電灯だけが、やけに明るい。

サク、サク

歩むごとに波の音が近づき、間近に海を感じたところで、少年は歩みを止めた。

はぁ……。

少年ひとつ大きく息を吐いて、少ししめった砂の上に座る。

夏も終わりに近づき、夜になると少し寒い。それが走って熱くなっている体には気持ちよかった。

カチリと懐中電灯の光を消す。

あたりが真っ暗闇になった。

闇と波の音だけが少年を包み込んでいた。

「たつみ」

膝を抱えて少年は呟いた。

それは物心がつく前からずっと一緒にいた親友の名前だった。

生まれたときから十四年間、ずっと一緒にいた親友。その彼と、

二週間も前から会っていない。

少年は、膝に顔を埋めた。

最後に親友の姿を見たのが、この海だった。

「淘汰！　すぐに大人の人を呼んでこい！」

巽が叫んで海に飛び込んだ。

「わかった！」

うなずいて、淘汰は人を呼びに走った。

それが、最後だった。

ザン……、ザン……

波の寄せる音だけが耳に響く。

少年はふつと息をついた。

たった二週間前だ。

なのに、いやになるほど長い二週間だった。

バカげたことをしている。

少年は今自分がしていることをそう思った。

けれど、自分のできることなら何だっただった。

小学生の頃、大した意味もなくした約束。それを果たすことができたなら。

海とも陸とも空とも区別の付かない闇を見つめながら、約束したあの日を思い出す。

やっぱりおまえ、頭よかったよ。俺、バカだから、今でもばあちゃんのことって意味、わかんねえや……。

泣きそうになりながら、少年が笑う。

幼い頃かわした約束を果たすため、新月を待って家を抜け出してきた。

少年は待っていた。

あの昔話のように、あかりが灯るのを。

この海に消えた親友を捜すためのあかりが灯るのを。

潮風が、走って温まった体に心地よい。

逆だったらよかったのになあ……。おまえだったら明かりの灯し方、わかっていたのに……。

膝を抱えたまま、闇を見つめる。

もしおまえがここにいたら、なんて言うかな。

いつも一緒にいた親友。思い浮かべて、ふと顔がゆるんだ。

ああ、そうだ。きつとこんな時なら、笑って俺を見てる。

からかうように笑いながら、気持ちを落ち着かせるように、言うかもしれない。

『どうせおまえはバカなんだから、考えるだけ無駄だ。ばあちゃんのことように、一生懸命祈ってたら？ どうせそのくらいしかできないんだ、そうしとけ』

……言いそうだ。

小バカにしたように、皮肉げに言う親友の姿が思い浮かぶ。

それがあまりにも親友らしくて、自分で想像して、おかしくてぶ

つと吹きだした。

「……八八八……」

声を上げて笑った。そして笑いながら考えた。どうしてあいつがここにいないんだろう、と。

笑っているのに、泣きたいような虚しさが胸を占める。いつも一緒にいた。

性格は正反対といってもいいほど全く違うのに、物心ついた頃から今まで、変わらず一緒だった。

泳ぎの上手いヤツで、溺れるようなへまをするヤツじゃなかった。何だつてできて、要領がよくて運動もできて。

なのに今、あいつは、ここにいない。

「……たつみ……」

親友が側にいないことが、たまらなく辛い。

どうしてここにるのが異じやないんだ。

ドジをするのはいつも少年のほうだった。

少年は心の中で責めるように親友に問いかける。

ドジを踏むのは俺の専売特許だと言ったのはおまえじゃないか。

そのおまえがドジ踏んで、どうして俺がここにいるんだ。

何度も繰り返し返した答えのない問いかけ。

バカをするのは少年、それをフォローするのが親友。それが当たり前にならなっていた関係。

彼のすることに間違いはないと思っていた。

だから。

と、少年は膝を抱える腕に力を込めた。

こんな事でおまえがいなくなるなんて、思いもしなかった……。

この二週間、ずっと少年を苛み続けてきた後悔が、耐えられないほどの重さでのしかかってくる。

あの時もっと他の方法があったのに、俺はみすみすあいつをこの海に置き去りにしてしまった。

そしてそのまま、親友は姿を消した。

『死んでなんかいないだろう？ 早く帰ってこい！』
海に消えた親友を想い、祈り続けたこの二週間。

救助の人達が親友を捜しにこの海に入った。救助隊の名は、まもなく捜索隊という名前になった。

おそらくもう生きてはいない。

誰もがそう言った。

そして数日前に捜索は打ち切られた。

けれど遺体はまだ上がっていない。

親友はこの闇の向こうに、いる。

少年は何も見えない暗闇を、ただ見つめた。

思い浮かぶのは、あの日の自分達。

闇にまぎれて今は見えないが、少年のすぐ近くで砂浜は終わり、テトラポットが積み重ねられている。そのテトラポットの向こうには、親友が消えた場所へと続く。

3 回想1

3 回想

それは、いつもと変わらない平日だった。

「巽！ 競争、競争！」

放課後、開放されたプールへ向かいながら淘汰は大声で叫んだ。

先にプールサイドに立つと、ゆっくりと歩いてくる巽にぶんぶん
と手を振って促す。

それを見て、興味なさげだった巽の顔がニヤリと笑う。

「おう」

軽く手を上げ巽が歩み寄ってきた。

「五十メートル、クロールな」

「了解」

話しながら軽くストレッチをして、飛び込み台に並ぶ。

「今日は絶対負けないかな！」

淘汰がびしつと指をさして勝利宣言をすると、巽がどうだかとい
うように、にやにやと笑った。

ほとんど日課になっている淘汰と巽の競争。

物事に対して妙に冷めている巽は、基本的にこういったことには
ほとんど興味を示さないのだが、水泳だけは別だった。

泳ぐのは好きらしく、淘汰が誘えば必ずつける。

クラスでも特に淘汰と巽は速い。二人に体格差があるにもかかわ
らず、競えば抜きつ抜かれつ。二人はそれがおもしろくて毎日のよ
うに競っていた。

ただ、泳ぎ方には歴然とした差があった。無駄の多い体力勝負な
淘汰の泳ぎ方に比べ、巽はフォームをしつかりとさせきれいな泳ぎ
方でスピードを出す。

競争を抜きで考えると、断然に巽のほうが泳ぎは上手い。まだ身体が成長しきっていない巽が、だいぶ体のできあがっている淘汰と対等にスピードを競えるのは、そこに理由があった。

「んじゃあ……」

二人準備が整うと、淘汰は周りを見渡した。

隣には待ちかまえたように友昭がいる。淘汰と似た感じのバカ騒ぎが好きな友人だ。

彼が審判をしてやろうと待っているのに気付いて、淘汰はあえて他を探す。

「あ、柏木ーっ」

プールのフェンスの向こう、帰宅しようとするクラスメートを見つけて淘汰は声を掛けた。

「ちよつと審判してくんねえ？」

ちよつと驚いた顔で淘汰のほうを向くと、柏木は小さく笑う。

「ああ、オツケー」

ひらひらと手を振ると、彼は軽くうなずいた。

「おいっ、何で俺がここにいるのに帰ってる柏木呼ぶわけ？」

「だってお前、この前ちゃんと見そこねたし」、柏木のが正確じゃん

すつとぼけて答えると、友昭から雄叫びが上がった。

「くっそおーっ、むかつくーっ」

淘汰はからかうように笑いながら、悔しがる姿を見て更に笑う。

「そりゃさ、俺は柏木に比べたら全然ダメだけどさ、おまえ友達がいなさすぎー！」

友昭ときゃあぎゃあけんかをして楽しんでいると、制服のままに柏木がプールサイドまで来た。

「お、柏木、サンキュー。なあ、一緒に泳がねえ？　一緒に競争しようぜ」

「遠慮しとくわ。俺、おまえらに勝てる自信ねえし」

柏木は薄く笑って、ひよいと肩をすくめる。

それは真剣に泳いでないだけじゃ、と思わないでもなかったが、褒め言葉としてとっておくことにした。

「そっか？ まあ、俺速いしな」

淘汰は頭をかいて、胸を張った。

柏木は、巽の数少ない親しい友人で、必然的に淘汰ともそれなりに親しい。

友達づきあいにはあまり積極的ではない巽だったが、柏木とはずいぶん気が合っているようだった。

柏木はどちらかというと無口な少年で、落ち着いた様子は一見巽と似ていた。しかし実際はいろんな意味でずいぶん違っている。人の寄らない巽に比べて、柏木の周りには人がいた。頼れる存在、というのだろうか、落ち着いた様子の彼のもとにはよく人が集まるのだ。

もつとも本人はそれほど他人との交流を好んでいるようでもなかったらしい。そんなところは二人ともよく似ているのだろう。柏木は集まってくるグループからはずれ、巽に話しかけていることがよくあった。

柏木の存在はどこか人を安心させる。淘汰もそんな彼を結構気に入っていた。

「おまえ、時間よかったの？」

巽が、帰りがけに呼び止めたことを簡単にわびると、柏木は笑ってそれに答える。

「ああ、気にすんな」

柏木と巽が談笑しはじめるのを淘汰が横目で見てみると、後ろで友昭達の声がした。

「なあ、今日はどっちだと思う？」

「そうだなあ、最近淘汰連敗だしなあ、また巽かもな」

淘汰に聞かせるつもりもあるのだろう、声を大きくして友昭が言う。勿論淘汰をからかうように、その目をチラリと向けながら。

「やっぱそうだよなあ、でも、それじゃ淘汰かわいそうだから、俺

は淘汰な」

「アイス賭けるか？」

「なら、巽！」

「かけになんねーっ」

けらけらと笑う友昭の声に、淘汰は振り返ると怒鳴る。

「カケてんじゃねえっ」

笑いながらペシッと友昭を殴った。

そして巽を見た。

「ンじゃ、巽、やるぜっ」

気合いを入れて屈伸などしてみせると、淘汰は飛び込み台に立った。

「いつでも」

続いて巽も隣の飛び込み台に立ってフンと笑う。

柏木のスタートの声を合図に、飛び込む。

泳ぎながら、隣に巽がいるのがわかる。

「あゝっ、もうっ、くっそー！」

ゴールの壁にタッチすると、水から顔を上げ淘汰は叫んだ。

巽がそれを嬉しそうににやにやと笑いながら見ていた。

「今日も、俺の勝ち、な」

どうだといわんばかりの勝ち誇った表情。

こんな時でないためつたに見られないような、彼にはめずらしい年相応の楽しげな表情だ。

淘汰がプールサイドにいる柏木を見ると「お前の負け」と言っ
て笑った。

「ちつくしょー！」

プールサイドに上がると心底くやしそうに淘汰は頭を抱えて座り
込んだが、すぐに立ち上がり巽に指を突きつける。

「明日は絶対勝つからなっ、見てろよっ」

淘汰は負け犬の遠吠えにしか聞こえないリベンジを誓う。

ここ連日、淘汰は巽に負けていた。ほんのちよっとの差だ。でも

ワンテンポ遅れて負ける。

なんでかなあ

小首を傾げる少年に、苦笑気味な親友の声がした。

「お前、フォームをもう少し気にしたらもっと早くなるのに」
もったいなさそうに巽が呟いた。

淘汰はその言葉に困ったように顔をしかめる。

「そうかあ……？ でも、フォームとか言われてもよくわかんねえ
し」

淘汰は「まあいつか」と頭をかいて笑った。

4 回想2

それからしばらく泳いで、巽が帰ると言うのに会わせて淘汰もプールを出た。

そのあとはいつものように二人で海沿いの道を歩いて帰っていた。

「なあ、巽、あのゲーム終わった？」

淘汰が下手に出ながら巽をうかがい見ると、巽があきれたように言った。

「あのなあ、淘汰。そんなことより、する事あるだろ」

「へ？ んー？ 前のヤツはもうクリアしたし、最近ゲーム以外何もしていないから……」

ばこん。

巽に頭をはたかれた。

「あほう。誰がお前の趣味の話をするんだ。今日、課題が出てるの、もう忘れたのか？」

「後は頼んだ！」と言おうとして、速攻で遮られた。

「言つとくが！ 俺は教えないぞ。自分で考えろ」

「そんなあ、俺バカだからわかんねえよ、頼む！」

手を合わせる腰を九十度に曲げて頭を下げる。

「それはやる気がないからだ。自分で考えろ。間違つてでもとらあえずやれば見てやるから。いいな」

「たつみい」

情けない声を出して頼み込むが、親友は取り合ってくれない。

「ちゃんと宿題ぐらいしとかないと、またおばさんに怒られるぜ？」

「あゝっ、言うなよおっ、最近もう、すっげーうるさいんだよお」

歩きながら、ちくしょうと頭を抱える。

「じゃあ勉強しろよ」

「それも嫌だあつ」

「ンじゃ、おばさんに怒られるしかないな」

すっぱりと言い切られて、淘汰の脳裏に母の姿が過ぎる。

『ちよつとぐらいお母さんに勉強してる姿見せてもバチはあたんだいでしょつ。もう、ゲームばかりしてないで、やるべき事ぐらいはしなさい!』

想像して、淘汰はげんなりする。小うるさい母の小言は聞きたくない。

自分のために言っているとわかっていても、やりたくないものはやりたくないし、分からないものは分からないのだ。

「たつみ、たのむよお……」

「い・や・だ」

中学校に入ってから、淘汰の身長は一七〇をこえ、体つきもがつしりしてきて、声変わりもすんでいた。比べて巽はまだ一六〇前後の身長で、体つきも子供の域を超えていない。なのに、頼み込むのは淘汰の方で、巽の方が立場が強かった。

少々体がでかくなったところで、淘汰が巽に敵うことはなかった。

「課題終わったら、ゲーム貸してやるから、さっさと終わらせろよ」

淘汰はわざとらしいまでに項垂れて歩きながら、体いっぱいじけていると表現しても、巽は取り合ってくれない。

「あーあ、いいよ。明日は「分かりませんでしたー」って言うから」

いじけて言うともう一回巽にはたかれ、救いようがないと言わんばかりに淘汰を置き去りに速度を上げて歩いていく。

「うそ! うそですーっ、がんばりまーす!」

あせって淘汰は巽を追いかけた。

まだ昼間はじりじりと日が照りつける。夕方になると涼しい風も時折吹くが、それでも、まだ熱い時期だった。

海岸沿いの堤防の道、それは、いつもと変わりのない日だった。ふと、巽が立ち止まった。

「なー、ちゃんとやるから怒るなよー……？」

巽は立ち止まったまま、海の方を見つめていた。

気になって淘汰もそちらを見た。

海面に光が反射してまぶしい。

「なに？ 何かあるのか？」

真剣な巽の表情に、淘汰も身を乗り出して巽の見ているものを見ようとした。

何かが、ばちゃばちゃともがいているように見えた。

「……おい」

淘汰が呟くと、巽もうなずいた。

「やつぱりお前も、人がおぼれてるように見えるよな」

二人は荷物を投げ捨てると同時に堤防を超え、テトラポットを越えながらそこへ向かった。やはり、おぼれているのは人間のようにだった。

近づくにつれて、それがまだ幼い少女だとわかる。

「なんで、あんなガキがこんなアブねーとこにいるんだ！」

淘汰が苛立たしげに怒鳴った。

この区域は潮の流れが特にきつい。地元者でもこの辺りで泳ぐ者はいない。

そのため、この特に深くなっているここはテトラポットで人が近づけないようにしてあるのだ。

もう力が尽きそうになっているのだらう、水を掻く手に力がなかった。

「淘汰！ すぐに大人の人を呼んでこい！」

巽が叫んで海に飛び込んだ。

「わかった！」

うなずいて、淘汰は人を呼びに走った。

一度越えてきたテトラポットが、焦る気持ちを更につのらせる。すぐその堤防になかなか着かない。そしてやっとたどり着くと、降りるときはそれほどでもなかった堤防がやけに高く感じた。二人で話しながら歩いていたとき、周りに人影はなかった。

そう思うと更に焦りがつのる。

焦りのせいもあってか、なかなかうまく登ることが出来ず、四度目の挑戦でやっと堤防の上に登ることができた。あとは民家へ走ることだ。

走るのには自信があった。けれど走りながらやけに自分の足が遅く感じた。こんなにも自分の体は重かっただろうか。こんなに足は遅かっただろうか。

走りながら焦りが更につのってゆく。

「すみません！ 誰かいませんか！ 子供がおぼれています！」
やっとたどり着いた民家で叫んだが、誰も出てくる様子がない。

「ごめんよ！」

勝手に鍵のかかっている戸を開けて中を覗いたが、人気もなければ電話も近くに置いてなかった。

ちっ

舌打ちをして、淘汰は更に走った。

だいたいこの時期のこの時間はこのあたりの大人達はまだ帰ってきてない。

「すみません！ 誰かいませんか！」

また叫んで戸を開けた。

やはり人はいない。けれどこの家には電話が玄関に置いてあった。淘汰は迷わずその受話器を取る。

「ええと、一一九番だっけ、一一〇番だっけ……」

あせって頭が回らない、手はぶるぶると震えていた。

「どっちでもいいやっ」

あせる思いで押した。

「あの！ 子供がおぼれて、その、海で、それで、巽がその子を助けに海にはいったんです！」

向こうが声を出す前に、淘汰は怒鳴った。

「分かりました、救助に向かいますから、落ち着いて答えて下さい。……」

落ち着かなきゃ、思いながら、自分でも混乱してよく分からないまま、問われることをできるだけ詳しく伝えようとした。

どんな風に言ったかなんて、自分でも覚えていないし、分かっていなかったかもしれない。言いたい言葉がもどかしいくらい出てこなくて、向こうにちゃんと伝わっているのか、それすら判別がつかない。

電話を切る頃にはものすごい時間が過ぎたように感じた。

その家を出ると、淘汰はまたあせって走り出した。

救助がどのくらい後に来るか分からない。

誰か大人を呼ばなきゃ。

肩で息をしながら、これ以上走れないというほど苦しかったが、それでも走った。

そしてやっと小屋の影で仕事をしている人を見つけた。

「おじさん！」

息を切らしながら、声を振り絞った。

「助けて！ 友達が、子供がおぼれてるんだ！」

四十代半ばほどの男は、あまりにも必死な淘汰の様子に驚いたのか、作業をしていた手を止めすぐに駆け寄ってきた。

「どこだ？ 一一九番に連絡したか？」

「ぜえぜえと息を切らしながら、淘汰は何度もうなずいた。

「あっち、子供を助けに、友達が飛び込んだんだ、俺、すぐ人呼びに走ったから、わかんねえけど……」

走りながら堤防の向こうの海を指す。

男の顔が強ばった。

「ぼうず、先行ってる、ロープをとってくる」

淘汰は男の言葉に少しほっとし、うなずいて走りだした。しかしほんの数メートルの距離は、ひどく遠かった。

なんでこんなに遠いんだよお！

走るスピードは更に遅くなって、息が苦しい。

「ぼうず！ 乗れ！」

男が車で走ってくる、淘汰は助手席に乗り込んだ。

鞆が放り出された堤防のところまで車を止め、ロープを持った男と淘汰は堤防を越えた。

巽、無事でいろよ、巽！

気持ちばかりが急ぐ。

巽の飛び込んだ場所はすぐそこに見える。

しかし水面に巽の姿は見えない。

助けて上上がったのか？

そうあって欲しい、願いながらようやく波打ち際にたどり着いた。

ここを離れてから今までおそろしく長い時間が過ぎたような感覚に陥る。

人を捜しに走ってそんなに時間は経ってないはずだ。けれど何時間にも感じたその間に、巽の姿は見えなくなっていた。

5 回想3

「巽?! 巽?!」

テトラポットや水面を何度も見つめて親友の姿を探した。

そして淘汰は、親友の姿のかわりに、小さな少女がテトラポットに必死で捕まっただがたとふるえているのを見つけた。

真つ青な顔色と唇に、淘汰はとっさに駆け寄り、あわてて男を振り返った。

「おじさん、この子は俺が上に上げるから、おじさんは巽を捜して!」

叫んで淘汰は少女に手を伸ばしていると、後ろから、男の驚いた声が掛かった。

「巽? 助けに飛び込んだ子か? いないか?」

「いない! はやく! おじさん、早く! 巽を助けて!」

咽がかれるくらい大きな声で叫んだ。

男はうなずくとすぐさま海に潜った。

淘汰も続いて水に入り、力無い少女を抱えた。淘汰ほどの体格からすれば、もがく力さえなくしている少女相手に、それは難なくできたが、水の上に乗るとなると信じられないほど力がいった。

何度も持ち上げては、テトラポットの上に置こうとするが、なかなか引つかかってくれないのだ。さんざん走ったせいで足はぱんぱんに張っていたこともある。立ち泳ぎとなると更に足の筋肉を酷使用する。けれど、何度も失敗しながら、それでも少女を海からあげることができた。

その頃ようやくサイレンが響き、救助隊が来たことに気付く。

その間も、何度か男が息継ぎをしに海面に顔を出している。

男と一緒に巽を捜そうかと考えた。

しかしサイレンの音が止まり、周りが一気にざわめきはじめた事で、ハッと我にかえる。

少女を見ると、真っ青な顔をしてふるえてもいなかった。

淘汰は海を上がって少女を抱きかかえた。

冷たい。

息はしているようだが、今にも止まりそうに思えた。

どうしたらいい、どうしたら！

こんな時、どうしたらいいのか、まったく分からない。

寒さとは別の意味でがたがたとふるえた。

「君！ 大丈夫か！」

振り返ると、救助の人がいた。

「この子！」

淘汰は泣きそうになりながらその人に少女の体をあずけた。そして後ろにいる救助隊の人に向かって叫んだ。

「この子を助けに入った友達がいらないんだ！ おじさんがさっきから探してくれてるけど見つからない！ 巽を助けて！」

そして数人の救助隊員が海に潜った。替わりに男が海から上がってきた。

「おじさん、巽、いなかった？ あいつ、いなかったか？」

少しふるえながら荒く息をする男に詰めよった。

「すまん、ぼうず。思った以上に潮の流れが速い……」

「……そんな……」

既に潮に流されたということか……。

男の考えが分かって、淘汰は頭の中が真っ白になった。

「……そんな……」

頭がクラクラとした。

「ぼうず、顔が真っ青だ！ お前も横になって休んでおけ」

ぐいっと肩をつかまれ、揺すられた。

それを振り切るようにして波の打ち寄せる方へと体を向けた。

「ぼうず！ しっかりせんか！」

動きを止められ、再び体が揺すられる。

「巽！ たつみい！ たつみい！ たつみい！」

何度も海に向かって叫んだ。

淘汰は自分を押さえつける男の手を振りきろうともがいた。

「俺が探す！ 人に任せてられるか！ 俺が巽を捜す！」

「バカをいうな！ お前も溺れるぞ！」

「溺れない！ あいつだって溺れてない！ 巽は泳ぎは上手いんだ、俺よりずっと上手いんだ！ 溺れるわけないじゃないか！」

力任せに海へ向かおうとしながら叫ぶと、男に何度か肩を揺さぶるようにつかまれた。

「落ち着け、いいか、落ち着くんだ！ 救助の人が入っている！」

「だって、たつみ、たつみ……」

がたがた震えながら、何度も巽の名前を呟いた。

口の中が、しおっからい。

海水の味が、自分の涙か、判別はつかなかった。

「念のため、君も病院の方へ行こうか」

半ば引きずられるようにして堤防の向こうまで連れてこられた淘汰は、その言葉に力無く拒否を示した。

日はじりじりと照りつけてくる。濡れていた制服もだいぶ水分をとばして、早くに乾きだした部分は塩をふいていた。

救助の人は、まだ巽を見つけていない。

淘汰は何も出来ずにただぼんやりと海を見つめる。

再びうながすように救助隊員だか救急隊員だかが「行こう」とぼんぼんと肩を優しく叩いた。

その人の気遣いはうれしかった。けれど、その人の顔すら見ず、淘汰はただ首を横に何度も振った。

「……そうか。体でおかしいところはない？」

淘汰はうなずいた。

「どこか打つたりしてない？」

もう一度淘汰はうなずいた。

「わかった」

その人はそう言って、ちよつと淘汰のそばを離れた。

そして、しばらくすると、すぐにその人は戻ってきた。

「今日起こったことを全部聞かせて欲しいんだけど、大丈夫？」

なんとなく頭が働かず、言葉の意味を一拍ほど置いて理解する。

淘汰は再びやって来たその人の方に顔を向けると、他に二人大

人がいた。

警察だということはすぐに察しがついた。

じつと彼らを見て、淘汰はうなずいた。

「事故が起こる前から話してもらえるかな？」

淘汰はこくりとうなずいて、話し始めた。

「……学校の帰り、ここを通ってたんです。……」

淘汰が全て話すと、いくつかの質問をして、彼らは行った。

野次馬もやってきて、周りがだいぶ騒がしい。それに混じって

自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

母親の声だ。姿を探すと、彼女はせっぱ詰まったような表情を

して淘汰に向かって走ってきていた。

「あんた、けがはない？」

彼女は僅かにふるえながら息子の存在を確かめるかのように、

濡れている体を抱きしめた。

「誰かが海で溺れたらしいって……、そこに、あんたがいたって

いうから、お母さんびっくりしてとんできたのよ！」

泣きそうになって震えている母親に抱きしめられた。

「……異が……」

淘汰は呟いた。

「……異君？」

「……巽が、いないんだ……」

震える声で呟くと、母親がわずかに強ばったのがわかった。

「……俺、……俺が海に入ればよかった……」

自分を抱きしめる母親にしがみついて、淘汰は涙をこらえながら呟いた。

「俺の方が体力あったのに、こんな事にはならなかったかもしれないのに……！」

声を絞り出すように呟いた淘汰を、母親は更に力を込めて抱きしめた。

「お母さんは、あんたが無事でよかったと思うよ、どっちが海に入っても、同じだったと思うよ。淘汰、自分を責めないでね、お願いだから、そんな風に自分を責めないでね……」

ろくに状況などわかってもないだろうに、母親はそう言って淘汰を抱きしめた。

「巽、大丈夫かな、巽、死んだりなんかしないよね、お母さん」
声を震わして呟く淘汰を、母親はただ抱きしめることしかできなかった。

「……たつみ、……たつみ……たつみ……たつみ……」

自分より小さな母の腕の中は、やけに温かくて、淘汰は泣いた。

その日、夜になっても巽が見つかることはなかった。

6 回想4

翌日、警察の人が来て、再び、昨日の状況について尋ねてきた。

説明の時には、淘汰の両親も付き添っていたのだが、その時になつて初めて、昨日家族は誰も淘汰に事故のことを聞いてきたりしなかつた事に気付いた。

警察の人に話ながら、誰も巽のことが気にならないんだろうかと不思議に思うと同時に、誰も巽の心配をしていないように思えてならなかつた。

淘汰は無性に家族に対して腹立ちを覚えた。

警察の人が帰ろうとしたときだ、淘汰はふと気になっていたことを思い出し、彼らを呼び止めた。

「……あの、巽が助けたあの女の子、……大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だよ。今朝、目を覚まして、ご飯も食べたらしいよ。淘汰を安心させるように微笑んで、彼は言った。

「そうですか、……よかつた」

淘汰は少しだけ笑って頭を下げた。

巽が身を挺して救った命だ、無事でなければやりきれない。引き上げた時の正規のない青い顔を思い出して、もう大丈夫なのだほつとする。

一方、巽が見つかったという知らせは未だなく、今朝も朝から巽の搜索をしている。けれど、生存が絶望視されているのは淘汰の目にもわかつた。

搜索している海岸へ行くと、巽の両親がいた。

「おはようございます」

躊躇った末に声をかけると、難しい顔をしていたおじさんは淘汰を見つけると普段の表情で「おはよう」とあいさつを返してくれた。けれど、いつも優しいおばさんは目を潤ませて頭を下げただけだ

った。

何気に避けられたのがわかって、いたたまれない気分になった。無言で責められているように感じて辛かった。

俺が、飛び込んでいれば。

下を向いて唇を噛み締めると、そのまま二人に深く頭を下げる。巽の両親の顔を見ることが出来なかった。

淘汰は耐えきれずに走ってその場を去った。どこに向かうでもなく、その場から離れたくてただ走った。

とにかく走っていると、海岸から少し離れたところにある公園にたどり着いた。体は自然と、慣れた道を進んでいたのだろう。立ち止まって、少し躊躇った末、行く場所もなく、結局その公園に足を踏み入れる。

小さい頃に巽とよく遊んだ場所だった。

ゆっくりと辺りを見渡すと目に付いたのは二人とも好きだった、ブランコ。

それは遊んでいた頃に比べると、ずいぶん古びて見えた。

淘汰は腰をかけ、小さく地面を蹴った。

きい……、きい……。

音をたてて淘汰を乗せたブランコが揺れる。

「……死んでなんかないよな、お前が死ぬはずなんか……」

自分の口から漏れた声は、細く震えていた。

淘汰は自分の声の弱さに、そこにはらまれた恐怖を知る。

……神様、あいつを、巽を連れていかないで下さい。

奥歯を噛み締めて、祈った。

ぼたぼたと涙がこぼれ、こらえきれずに嗚咽が漏れる。

神様、どうか。

こんなに、真剣に神様に祈ったことなどなかった。こんなに神様の存在を信じたいと思ったことはなかった。

お願いします、巽を、助けて下さい……。

「……お願い、しま……す」

引きつったような声が漏れ、その後は声にならず、ただ開いた口から息だけが漏れた。

潮に流されたのなら、きっと生きてはいない。

わかっていても、それでも……！

「……たつみ、たつ、み……」

祈った。

生きていて欲しいと、帰ってきて欲しいと。

夕食を食べながら、淘汰は両親が話しているのを聞くともなしに聞いていた。

何をするにも無気力で、何も考えず、何もしたくなかった。

「……明日は、学校へ行きなさいね」

ぼうつとしていて、母の言葉を一瞬理解することができなかった。

「……え……？」

顔を上げると、二人とも淘汰を見ていた。父親が、有無を言わさぬ表情できっぱりという。

「明日は、学校へ行くんだ」

「でも、お父さん、……巽が見つかるまで、俺……」

「甘えるな。お前が残っていたところで何の役にも立たないだろう。今、お前ができること、お前がしなければいけないことはなんだ？」

容赦のない表情と言葉で、父は淘汰の苦しさを切り捨てるように言う。

けれど、いけるはずがないと淘汰は思った。普通の生活をして良いはずがない。

「だって、巽は、俺があの時海に入っていれば……」

「いい加減にしろ。あれは事故だ。」

突き放すようにきつい声で父が淘汰の言葉を遮って言う。

「……お父さん」

その父の言葉に、母がなだめるように声を掛けた。そして、母親は次いで淘汰を見た。

けれど、母親の言葉もまた、淘汰の望むものでもなかった。「いつまでもそうしているわけにはいかないのは分かるでしょう？」母の言葉に何の言葉も返せず、淘汰はうつむいた。とても、そんな気分にはなれなかった。

翌日、半ば無理矢理に淘汰は学校へと送り出された。

気の重さを表すかのように、自然と足の歩みも遅くなる。歩みの遅い淘汰の周りを何人も人が追い越していった。学校に行く気分じゃなかった。

自分を追い越していくにぎやかな声が、うるさくてたまらない。学校に着くと、淘汰の耳に響く賑やかな声は更に大きくなった。うるさい、だまれっ

心の中で何度も怒鳴る。

今すぐこの場から立ち去りたかった。

自分の気持ちと、周りの世界との落差が、たとえようもなく苦し
くのしかかってくるようだった。

けれど、慣れた教室までの廊下を、重い足が勝手にとぼとぼと歩
んで行く。

たどり着いた先にあるのは教室の扉。しばらく迷って教室のドア
を開けた。

そこには、まるで巽のことなど何もなかったかのように、クラス
メイト達がはしゃいでいる光景が目の前に広がっていた。

淘汰は立ち止まり、教室の中のその様子を見ていた。

元気なクラスメートの姿が、やけにいやなものに見える。

わき上がる不快感に、淘汰は教室から目をそらすと、その場を離
れようとした。

「松本、入らないのか？」

下駄箱に向かおうとしていた淘汰に声が掛けられた。

「……………」

淘汰は立ち止まり振り返ると、返事も返さずその主を見る。

「行こう」

柏木だった。彼は何でもないように言って淘汰を教室に入れた。二人で教室にはいると、わずかにはしゃぐ声が減った。

「おはよう、淘汰」

「淘汰おはよう」

クラスメート達が声を掛けてくる。けれど、その顔には先ほどまでの笑顔はない。

そんな、わずかに強ばった笑顔で遠慮がちに話しかけると、余計、不快に感じる。

淘汰は視線だけを彼らに向け、暗い表情のまま、ただうなずいた。

「おはよう」

わずかに呟いたが、その声はくぐもって、聞き取ることが出来たのは、ほんの数人だけだったかもしれない。

席に着く。

いつもは一番に騒がしい淘汰が、席に着いたまま、動こうとしない。

それがよけいにクラスメートの目を引いた。

クラスメートの一人が淘汰の席に歩み寄ってきた。

「……あのさ、あの時、お前一緒にいたんだろ？」

わずかに楽しげな含みを持って声が掛けられた。

「あの時」それが異が行方不明になったときということとは明白だ。

その無神経さに淘汰はむっとしたが、それでも暗い表情のまま「ああ」とだけ答えた。

すると、それだけでは好奇心がおさまらなかつたらしいそのクラスメートは更にいくつも質問をたたみかけてきた。

「なあ、どんなだったんだ？ 警察とか来たんだろ？」

うるさい、うるさい、うるさい！

心の中で淘汰は叫んだ。

もともと、このクラスメートは、無神経で、人によっては敬遠されがちな性格だった。

しかし決して悪いヤツではなく、普段は普通に話してそこそ親しいのだが、まさか、こんなときにまで人の気持ちを考えることができるヤツだとは思わなかった。

イライラした。殴り飛ばしてやりたいとも思った。

答えない淘汰に「なあ、何か言えよ」と、更にたたみかけてくる。耳をふさぎたくなつた。机の上で握りしめるコブシがわずかに震えた。かみしめる奥歯に力がこもる。

しかし、彼らから、うつむいている淘汰の表情は見え、気付いた様子はない。

ほうつておいてくれ！ 俺に近づくな！

思い出したくもない。考えただけで苦しくて、辛くてたまらなくなる。

そんな淘汰の気持ちが分からないクラスメートに怒りを覚えた。

「……やめろよ……」

遠くで止める声もしたが、好奇心の方が勝っているのだろう、それには耳もかさず、更に淘汰に問いかけてくる。

「なあ、淘汰、警察の事情聴取とかってほんとにやったのか？」

「いい加減にしるよ、淘汰の気持ちも考えろよ」

たまりかねたように、彼のとなりの少年が言った。

「お前だって、興味あるだろ？ 昨日言ってたじゃないか」

「そうだけど、でも……」

その言葉に、止めようとした少年も、口ごもる。

結局は他人事なのだ。

そんな少年の心遣いが更に腹立たしかった。

少年の制止はなんの役にも立たず、更にそのクラスメートは声を掛けてくる。

「なあ、淘汰、ちょっとくらい教えるよ」

彼に別段悪気があるわけでもなかった。単にめずらしい出来事に興味を引かれた、それだけのこと。

彼とよく話す淘汰はそれがわかった。

ただ、彼は自分の気持ちを優先しすぎて他人への思いやりが欠けていた。

いま淘汰は、それを許せる気分でもなかった。

”うるせえよ！”

ついに淘汰が叫ぼうとしたときだった。

ガン！

机を蹴る音がした。

淘汰以外の視線がそこに集中する。

柏木が淘汰の周りにいるクラスメートを無言のまま睨んでいた。

「……………」

柏木がそんなふうな態度で怒りを示すのはごくまれなことだった。そんな柏木に逆らおうという者もおらず、驚いたクラスメートもまた、興味を残しながらも、渋々と言った様子で、淘汰の席から離れた。

淘汰の周りは静かになった。けれど、握りしめられたこぶしは、変わらず力がこもっていた。

自分の周りの全てがうつととうしく思えてならなかった。

誰とも話したくなかった。

何もする気になれなかった。

その後に登校してきた友昭の遠慮がちな声も、ただ煩わしかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8859x/>

闇夜に灯る、彼方の灯火

2011年11月7日12時04分発行